



[本文監修:南九州歴史学会 画:KENRO]

明治維新150周年企画

かごしま

ISHIN物語

明治維新がもたらしたさまざまな変化を
分野ごとにご紹介します。

第1話 海の守りと工業の発展

江戸末期、迫りくる西洋諸国の脅威に対抗すべく、薩摩では藩主齊彬主導のもと、近代化・工業化が進められました。今回は、近代産業の礎を築いた海防と工業のお話です。

登場人物



集成館を指揮した蘭学者
八木 称平
Shohei Yagi

薩摩藩の蘭学者、緒方洪庵の適塾に入塾の後、齊彬の命で江戸でも蘭学に励みます。また長崎ではオランダ軍医の指導も受けました。薩摩藩では反射炉の建造のほか、ガス灯の実験などにも携わった人物です。



薩摩の紡績事業に貢献
石河 確太郎
Kakutarō Ishikawa

大和国出身の薩摩藩士。江戸や長崎に遊学した後、薩摩藩士となりました。齊彬の死後、紡績事業や交易事業に携わります。明治時代には紅茶製造方法を習得するためインドへ赴き茶葉を持ち帰り、製茶を全国各地に広めました。

維新紀行 郷土菓子

薩摩の近代化から生まれたかるかん

齊彬の時代、西洋の良質な砂糖に負けないよう、白砂糖の研究が進みました。また、水車動力を活かして米粉の製造も行っています。この白砂糖と米粉に山芋をあわせて作られるのが鹿児島郷土菓子・かるかん。齊彬の近代化とこのお菓子は切っても切り離せない関係にあるのです。



今回は 外交と経済

薩摩の近代化を支えた工業

今から170年ほど前、西洋諸国は次々とアジアに進出。植民地を増やしていきます。西洋諸国が日本に攻めてくるのではないかと、そして真先に攻め込まれるのはアジアへの窓口である琉球王国や薩摩藩ではないか。そのような危機感を抱く時代に、島津齊彬は藩主になりました。

「幕末の名君」と称される齊彬は西洋諸国に負けない、強く豊かな国づくりのため、鹿児島市磯の地に日本初の近代的工場群「集成館」を建設。ここを拠点に、海防を固めるための西洋船の建造や鉄製大砲の鑄造などの重工業のほか、紡績、薩摩切子の開発など多彩な近代化事業を進めます。このうち、工場群を指揮したひとりが八木称平



西洋の紡績技術を日本へ

八木たちの努力を受け継いだのが石河確太郎です。大和国奈良出身の石河は八木とともに反射炉建造に関わるだけでなく、齊彬から船の帆を作るため、紡績事業の近代化も託されていました。石河は齊彬の死後、その志を受け継ぐために紡績大国であったイギリスへの留学生派遣を建白。これが薩摩藩英国留学生です。彼らは留学だけでなく、紡績機械の購入や技術者の招聘を行いました。このようにして完成したのが日本初の近代紡績工場、鹿児島紡績所です。齊彬時代に自力で近代化に取り組んでいた薩摩藩の人々は、みるみるうちに紡績機械の技術を習得。イギリスのプラット社から3年契約で招かれた技術者がわずか1年で帰国したのは、薩摩藩士が予想以上に早く技術を習得したからではないかといわれています。

戦争によつて焼失。八木は鹿児島城下に築かれた洋学校「開成所」でも指導しますが、病で亡くなってしまいました。戦争によつて焼失。八木は鹿児島城下に築かれた洋学校「開成所」でも指導しますが、病で亡くなってしまいました。